

〈教育的タクト〉と実践としての陶冶論

－フンボルトにおけるタクト概念の用例分析－

“Pedagogical Tact” and the Theory of Bildung as Practice

An Analysis of the Concept of Tact in Wilhelm von Humboldt

伊 藤 敦 広

I. はじめに

本稿の目的は、18・19世紀ドイツの思想家ヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) におけるタクト概念の用法を検討することを通じて、「教育的タクト」概念成立期のタクト概念の意味の射程を検証するとともに、フンボルト陶冶論における同概念の意義を解明することにある。

周知のように、「教育的タクト (Pädagogischer Takt)」は教育学の中心概念の一つである。学問としての教育学の創設者として知られているヘルバルト (Johann Friedrich Herbart, 1776-1841) は、「最初の教育学講義」(1802) において、教育的タクトを理論と実践との間の「一つの中項」と意味づけることで、教育的タクト言説の源流に位置している。ヘルバルトによれば、教育的タクトとは一般的に「すばやい判断と決定」であるが、それは「慣行のようにいつでも変わることなく一様に行われるものではない」ため、その内実は明確に定義困難なものである。この概念の教育学および教育実践上の重要性について、ヘルバルトは次のように結論づけている。

だれかがよい教師になるか、それとも悪い教師になるかどうかを左右する大問題はただ一つ、それは、その人の中にタクトがどのように形成されるか、つまり、学問がその普遍性をもって表明する法則に忠実に形成されるか、それとも不忠実に形成されるかどうかということである。¹

このように、理論と実践、理念と現実の「中項」として教師に求められるタクトは、それをいかに身につけるかによって教師の資質が評価されるものであるというのである。とはいえヘルバルトは「タクト」の意味内容について、同テキストにおいて詳しい説明を与えなかった²。

そのためヘルバルト以後になると、教育的タクトをめぐるには実に多種多様な言説が生み出されることになる。教育的タクト概念を主題化した研究の概観を行なったミュラーによれば、ヘルバルト以後の教育的タクトをめぐる言説は、この概念によって指し示される正確な意味内容が論者によって異なり、それを明確化することにきわめて大きな困難が伴うことを示している³。ミュラーが指摘しているように、概念の意味内容が確定していない(がゆえに多様な解釈が可能である)点に、現代の議論における教育的タクト概念固有の生産性を認めることもできるだろう。

とはいえこれらの研究とは別の文脈から、概念の歴史的意味内容を確定していくこともまた基礎作業としては必須である。そもそも理論と実践との関係ととり結ぶ点に「教育的タクト」概念の固有性が認められるにせよ、この両者の関係は教育学という学問領域のみで問題視されるわけではない。ヘルバルトがタクト概念にあえて「教育的」という形容をする必要があったのは、当時この概念が理論と実践の〈はざま〉を考えるための語として用いられえたことを示している。したがって概念の意味内容を歴史に即した形で理解しようとするのであれば、当然ながらヘルバルトのテキストのみならず、当時のコンテクストを踏まえて概念の共時的意味内容を個別研究によって画定していく必要があることになる。

本稿はタクト概念の特徴を歴史的に検証するためのささやかな寄与として、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)の陶冶論に着目する。フンボルトは一般的に、ベルリン大学を創設したプロイセンの教育制度改革者として知られている。しかし彼はヘルバルトとは異なり狭い意味での教育学者ではない。官僚として教育制度改革に携わったことは事実ではあるが、他者への形成的働きかけとしての「教育(Erziehung/Education)」ではなく自己形成としての「陶冶(Bildung)」に関心を持ち続けたフンボルトは、学校という教育空間において教師－生徒間に生じる固有の諸問題に集中的に取り組んだわけではない。この意味で「教育的タクト」の概念史に寄与する上では、フンボルトは必ずしも標準的な人物とは言えないだろう。

にもかかわらず、本稿でフンボルトを取りあげることには相応の理由がある。というのも教育改革の責任者であったときにヘルバルトをケーニヒスベルクの学術委員会のメンバーに推挙するなど、フンボルトはヘルバルトと直接の交流があった⁴。くわえてフンボルトとヘルバルトは、批判哲学をみずからの思想の基盤にした点で、哲学的・思想的共通性も存在する。何よりフンボルトは「陶治理論(Bildungstheorie)」という観点から自身の諸学問研究を行ないつつ、理論と実践、理念と現実の〈はざま〉をいかに考えるかを大きな研究課題としていた。フンボルトのテキストにおける「タクト」が、つねに明確に定義づけられた特殊な概念として用いられているわけではないにせよ、理論と実践の関係をめぐる重要な局面でタクト概念が使用されていることは、概念史研究という意味でもフンボルトの思想研究という意味でも注目に値する。したがってフンボルトにおけるタクト概念

の用例分析を十分に行なえば、フンボルトにおけるタクトの位置づけが明確化するとともに、のちに受け継がれていくヘルバルト的な「教育的タクト」とは異なる意味領域が示されることになるだろう。

II. フンボルトにおけるタクト概念の用法

1. 人間学の方法論の構成要素としてのタクト

啓蒙主義期に生きたフンボルトは、諸個人の自己陶冶による社会全体の改善を構想していた。実際の社会改革を目指すかゆえに現実から遊離した「哲学的」理念を打ち立てるのではなく、実現可能な理想を探求したフンボルトは、時間・空間を超越した「人類＝人間性(Menschheit)」一般を超越論的に探求することはなかった。むしろ時代、国、風土、言語など様々な要因によってその現われ方を異にする現実の個別の人間のあるがままの姿を哲学的かつ経験的に探求することを自己の研究の重要な課題としていた。フンボルトは実際の人間の研究を介して、その人間の自己形成(＝陶冶)の問題圏に進んでいくことを考えていたのである。

人間のあるがままの姿とあるべき姿を同時に探求するこの人間学において、タクト概念は幾度か用いられている。人間学研究の方法論である「比較人間学の計画」⁵には、以下のような記述がみられる。

Daher bleibt nicht allein der gesunde und natürliche Tact, der, wenn auch manchmal im Einzelnen, doch selten im Ganzen grosse Fehlgriffe thut, schlechterdings bei diesen stehen, sondern auch der philosophischste Menschenkenner behält dieselben unverrückt vor Augen, um an ihnen, als an unmittelbaren Thatsachen, seine tiefer eingehenden Urtheile zu prüfen und zu berichtigen. [AA 1, 399] ⁶

ゆえにただ健全で自然なタクト——これは細かな点で誤りを犯すことは多々あるが、全体において大きな間違いをすることはまれである——だけがこれらの指標〔身体の構造や行為に表れるあらゆる外的なもの〕にとどまるのではない。最も哲学的な人間学者も、直接の事実であるそれらのものによって自らの詳細な判断を検査し訂正するために、それに目を凝らすことになる。〔傍点は引用者〕

この箇所では、思弁的な人間研究とは異なり、対象となる個別具体的な人間の外的特徴に着目すべきであると説かれている。ここで「健全で自然なタクト」は哲学的な人間研究と対比的に扱われているため、その意味内容は自然な感覚ないし「常識」と言い換えられるだろう。この「タクト」には、人間を理解するうえで「細かな点で誤りを犯すことは

多々あるが、全体において大きな間違いをすることはまれ」なものとして、すでに積極的意義が認められている。「比較人間学の計画」の方法論をさらに発展させた論考「18世紀」(1796-97)でも、フンボルトにおけるタクト概念の性質が垣間見られる。

Wird nun ein Wort neu geformt, oder doch seine Bedeutung neu gestempelt, so hat es fürs erste wenigstens bloss die eine, logische Sphäre des dadurch bezeichneten Begriffs. Es stellt daher nur diesen dem Verstande dar, die Phantasie und das Gefühl lässt es unberührt; denn da es durch eine freie Verstandeshandlung, nicht bei Gelegenheit und auf Veranlassung einer Wahrnehmung des Takts entstanden ist, und der Gebrauch noch keine Nebenvorstellungen damit verknüpft hat, so haben beide nichts, woran sie es festhalten könnten. [AA 2, 74]

ところで一つの語が新たに形成されるか、それともその意義が新たに刻印される場合、少なくともさしあたりその語は一つの領域を有する、すなわちその語によって名づけられる概念の論理的領域を有する。ゆえにこの語は知性に対しこの概念を意味するだけで、想像力や感情に関わることはない。というのもそのときこの語は自由な知性の働きによって生じるのであって、偶然に生じるのでもなければ、タクトの遂行に基づいて生じるわけでもないからである。その語の用法はまだそれに副次的観念を結びつけてはいないので、両者はその語を固定できるものを何も有していないのである。

新語の形成について論じられているこの箇所では、「知性(Verstand)」が「想像力(Phantasie)」・「感情(Gefühl)」と対比的に扱われている。新たな言葉が人工的につくられるときには、人間の知性のみが働いていて、そのほかの想像力や感情といった他の能力は(ほとんど)働いていないというのである。この箇所は人間学研究の方法論からは若干外れるが、「自由な知性の働き(Freie Verstandeshandlung)」が「タクトの遂行(Wahrnehmung des Takts)」と対比されていることから分かるように、タクトがそれを用いる人間の想像力や感情を含みこむものとされている事実は確認できる。

なお、ここでは当時の学問上の慣例にならって人間の諸能力を区分する能力心理学の術語が用いられているとはいえ、人間学研究においてタクトの働きは知性の働きと対立するわけではない。むしろ個別具体的な人間の特徴を把握し、そのあるべき姿を捉えるために、それらの能力は共同的に働いていなければならない。これと関連して、フンボルトは同論考の次の箇所で、いっそう明確にタクトの意義を語ることになる。

Die soeben genannten Hilfsmittel zur Menschenkenntniss sind daher, wie man leicht einsieht, nicht von der Art, dass sie unmittelbar wichtige und genau bestimmte Resultate

versprechen sollten. Aber sie leisten dagegen einen noch mehr ausgebreiteten und wichtigeren Nutzen. Indem die Seele des Beobachters sich die Gestalt, die physische Beschaffenheit und sogar (denn auch diess muss hierher gerechnet werden) die äussre Lage des beobachteten Individuums einzuprägen sucht, macht sie sich genauer mit demselben bekannt, und kommt mehr in den Stand, sich an die Stelle desselben zu versetzen. Der Takt, von dem in der Menschenkenntniss so viel abhängt, kann und muss durch ein doppeltes Mittel unterstützt werden. Das erste besteht darin, die Aussprüche desselben immer auf deutliche Begriffe zurückzubringen und nach den Regeln des Verstandes zu prüfen, das zweite ist aber das, wovon wir hier reden, die äussre Erscheinungsart des Subjects genau zu beobachten und sich lebendig einzuprägen. Jenes berichtigt seine Fehler, nachdem er sehr thätig gewesen ist; diess leitet ihn während seiner Wirksamkeit selbst, und ist daher insofern noch wichtiger, als das erstere. [AA 2, 81]

ゆえに上で挙げた人間知のための補助手段〔観相学など人間の外形から内面を探る方法〕は、容易に分かるように、直接的に重要で正確に定められた結果を約束するといった類いのものではない。しかしそれはより広範かつ重要な利益をもたらす。観察される個人の外見、身体的性質、そして(これもここに数え上げられるべきものであるが)外的境遇さえも記憶しようとすることで、観察者の心はその個人についてより正確に知ることになり、その個人の立場に自らを置き入れること〔感情移入〕がいつそうできるようになるのである。人間知においてきわめて多くのことが依存しているこのタクトは二つの仕方で補助されうるし、補助されなければならない。第一は、タクトの表現をつねに明晰な概念に連れ戻し、知性の規則にしたがって検証することである。だが第二は——ここではこれについて論じているのだが——主体の外的な現れ方を正確に観察し、生き生きと記憶することである。前者はタクトが働いた後でその誤りを訂正するが、後者はタクトが作用しているさなかにタクトを導くがゆえに、前者よりもはるかに重要である。

フンボルトは同じ箇所ではファーター(Johann Caspar Lavater, 1741-1801)やカンパー(Petrus Camper, 1722-1789)の名を挙げつつ、人間の外面から内面を探る方法として「観相学(Physiognomie)」に言及している⁷。フンボルトはその功績を認めているとはいえ、人間の外形を「人間の内的性格の全体の最善かつほとんど唯一の認識根拠にしている」点で近代の観相学者は誤っているとする。むしろ観相学ないしタクトによって得られた人間の知識は、「明晰な概念」によって再び「知性の規則にしたがって」(＝学問的に)検証される必要があるという。いわば対象の直接的観察によりもたらされた理解は、学問的説明によって修正される必要があるのである。

さらに、ここでタクトは明確に、個別的人間の知識を得るための不可欠の手段となる。

というのも、たしかにタクトは知性のみならず研究者自身の「想像力や感情に関わる」ため、正確に定められた知識をもたらすものではない。しかし研究者は、そのタクトによって対象となる個人に独自の仕方で感情移入し、理解・解釈することができるようになるとされ、フンボルトの場合この独自の理解・解釈に意義があると認められているからである。

すでに述べたように、フンボルトは人類一般がいかにあるべきかではなく、現実の多様な諸個人がそれぞれにいかにあるべきかを問題にしていた。抽象的・形式的な人類の理念の規定のみであれば哲学的思弁でたりる。しかし現実の多様な諸個人は様々な制約を受けており、個人がそうした抽象的理念を実現することは不可能である。ここからフンボルトは現実の諸個人にそれぞれ実現可能な「個別的な理想」(フンボルトの用語で言うところの「性格(Charakter)」)が存在すると想定し、それを探求した。この理想は通常の知性のみで把握されうるものではなく、むしろ研究者の想像力や感情を介して理解され、解釈され、構成される。タクトはこのときに決定的な役割を果たすのである⁸。

これまでの箇所から、フンボルトの人間学におけるタクト概念の特徴は次のようにまとめることができるだろう。人間学において求められるタクトは、いわば研究者自身の持つ自然な常識的感覚のようなものであり、論理的につねに無謬だが現実の個別的人間を捉えることのない思弁とは質的に異なる。このタクトは研究者の知性よりもむしろ想像力や感情に関わるがゆえに誤りを犯さないわけではない。とはいえそこで得られた個別的人間の知識・理解、すなわち蓋然性に基づく真理は、改めて学問的検証に付されることでより適切な理解・解釈に繋がっていく。そしてこのタクトを介して、現実の個別的人間のあるがままの姿(存在)のみならず、あるべき姿(当為)が予感されることになるのである。

2. 理想化された古代人の特性としてのタクト

このようにフンボルトの人間学は、多様な個別的な人間の特性を把握するにあたって、近代科学の枠を逸脱する。個別的人間の存在と当為を同時に問題とするがゆえに、研究者自身の感情や想像力に基づくタクトという、普遍妥当性を指向する近代の学問では出ない幕のない概念が持ち出されることになる。

興味深いことに、フンボルトはこのタクトを古代人(特に古代ギリシャ人)の特性であるとしており、この姿勢は初期から後期まで一貫している。初期の論考「古代、特にギリシャ古代の研究について」(1793)には次のような用例が見られる。

Als sie noch sehr viele Spuren der Rohheit anfangender Nationen verriethen, besaßen sie schon eine überaus grosse Empfänglichkeit für jede Schönheit der Natur und der Kunst, einen feingebildeten Takt, und einen richtigen Geschmack, nicht der Kritik, aber der Empfindung, [...]. In seinem ersten Lallen verräth der Grieche feines und

richtiges Gefühl; und in dem reifen Alter des Mannes verliert er nicht ganz seinen ersten einfachen Kindersinn. Hierin, dünkt mich, liegt ein grosser Theil des eigentlich Charakteristischen der Nation. [AA 1, 268f.]

ギリシャ人は生まれたばかりの国民が持つきわめて多くの粗野の痕跡を露呈したときにはすでにあらゆる自然美や芸術美に対する非常に強い感受性を持ち、批評ではなく感情の洗練されたタクトおよび正しい趣味を持っていた [...]。ギリシャ人はまわらぬ舌で話し始めたときすでに繊細で正しい感情を露呈していた。ギリシャ人は成熟した年になったときにも、最初の単純な子どもの感覚を完全には失わなかった。私が思うに、ここには真にこの国民の性格をなすものの大半がある。

フンボルトの死後に出版された『カヴィ語研究序説』（1836）においても、まったく同様にタクトと趣味は古代人特有の性質とされている。

[...] giengen sie in allen geistigen Thätigkeiten auf die Auffassung und Darstellung des Charakters aus, immer aber mit dem Gefühle, dass nur das vollendete Eindringen in die Anschauung ihn zu erkennen und zu zeichnen vermag und dass das an sich nie völlig auszudrückende Ganze derselben nur aus einer, vermitteltst richtigen, gerade auf jene Einheit gerichteten Tacts geordneten Verknüpfung der Einzelheiten hervorspringen kann. [AA 7, 182]

[...] 彼ら〔ギリシャ人〕は精神活動を営むときつねに性格というものを把握し表現することを目指していた。しかしその際ギリシャ人は直観の内へ完全に入り込むことによってのみ、性格を認識しかつ表現することができるということをわきまえていたし、直観それ自身を完全に全体として表現することはできないものの、しいて直観をまとめようとすれば、前に述べたような統一性を目指すことこそ正しいタクトであると心得て、そのうえで、個別的なものを整然と結合しなくてはならない、と常々感じていたのである。⁹

Sie besaßen in höherem Grade, als irgend ein anderes Volk Tact und Geschmack und der sich in allen ihren Werken offenbarende zeichnet sich noch vorzugsweise dadurch aus, dass die Verletzung der Zartheit des Gefühls niemals auf Kosten seiner Stärke oder der Naturwahrheit vermieden wird. [AA 7, 185]

ギリシャ人は他のいかなる民族に比べても、タクトと趣味を持っている点ではまさっていた。そしてこの二つの性質はギリシャ人の作り出したものすべてに認められるのであるが、その主たる特徴は、感情の強さを犠牲にするか、あるいは自然の真理を犠牲にすると、繊細な感情が傷つけられることは決して避けられないという点にあるのである。

これらの箇所からは、タクトや趣味が古代ギリシャ人特有の性質と理解されているという事実にくわえ、上述の人間学研究と共通する議論がいくつか確認できる。たとえば、精神活動を営む上ではとりわけ「性格」ないし個別的理想が目指される点、その「性格」が認識主体の直接的観察ないし「直観」を介して統一され、構成される点などである。

実際のところ、中期の論考である「ラティウムとヘラス」(1806)では、「古代人の手法」としてより明確に次のように言われている。

[...] daher alles im Ganzen und Einzelnen, nur mehr oder minder, symbolisch zu bahandeln, und darin mit so glücklichen Tacte begabt zu seyn, dass ebensosehr die Reinheit der Idee, als die Individualität der Wirklichkeit geschont wird. – Hierbei Bestimmung des Begriffs des Symbols und Warnung nicht das Sichtbare und Unsichtbare so zu trennen, als sey eins bloss die Hülle des sonst unabhängigen Andern. [AA 3, 137]

[…古代人の手法のきわめて独自なところは、] ゆえにあらゆるものを全体と個別の中で、程度の差こそあれ象徴的に扱うこと、そしてその点で、現実の個性と理念の純粋性が同じように保護されるほどすばらしいタクトを与えられていることである。——ここには象徴概念の規定と、一方のものがふつう独立したもう一方のもののバールでしかないかのよう^{シンボル}に、見えるものと見えないものを分離してはならないという警告がある。

「現実の個性と理念の純粋性」、「見えるものと見えないもの」といった表現は、個と普遍、存在と当為、多様と統一などの表現で言い換えられるだろう。フンボルトはこれらを分離せず一体的に把握する点に、古代人の特性と自分自身(=近代人)のあるべき姿を見てとった。つまり、現実の多様な個人の内にそれぞれの理念を創出すること、現実に見えているあるがままの人間の姿のうちに人間のあるべき姿を見出すことは、古代人の特性であるとともに、フンボルトが理想とする人間学者が具えているべき特性とされるのである。

ここで、そもそもフンボルトが言う古代人の性質は歴史的・実証的に検証されうるものではないという事実を確認する必要があるだろう¹⁰。「新人文主義者」フンボルトは生涯にわたって古代研究を続けたが、そこでの古代像にはつねに近代人に欠落した特性が投影されている。すなわちフンボルトにおける古代(ギリシャ)人は、いわば近代人の完全性の象徴として捉えられているとすることができる。フンボルトの発想に従えば、知性への偏重は近代全体を特徴づける性質であるが、想像力や感情に関わるタクトや趣味が古代人特有の性質とされることは、間接的に、きたるべき人間のあり方を指し示すことにもなっているのである。

Ⅲ. おわりに

これまでの論述では、フンボルトにおけるタクト概念の用例のすべてを取り上げたわけではない。しかし少なくとも次のことはすでに明らかだと言えるだろう。すなわち、フンボルトの人間学(およびそれにもとづく陶冶論)におけるタクトは知性ではなく想像力や感情に関わり、研究者に求められる資質とされていること、さらにタクトは趣味と並んで理想化された古代人の特性とされており、その意味で近代を生きる人間に欠けている(がゆえに必要とされる)理想的特性とされていること、である。

はじめに述べたように、ヘルバルトによって示された「教育的タクト」の概念は、教育学という学問(理論)と教育現場という現実(実践)をとり結ぶ技法として、特別な位置づけを与えられてきた。概して理論を実践に適用すること、普遍と個別を媒介することにはつねに原理的な困難が伴う。ヘルバルトは教育学と教育実践のはざまに生じるこのアポリアに 대응するため、タクトや判断力といった概念に着目した。タクト概念を明確に特殊な術語として用いているわけではないフンボルトも、人間学に基づく陶冶論という自らの学問領域に生じる同種のアポリアに同じ概念によって応えようとしたのである¹⁾。ここには18世紀末から19世紀初頭におけるタクト概念の意味の一例が現れているだろう。

さらにフンボルトの陶冶論・人間学そのものもタクトや趣味といった概念を含みこむことで、必然的に個々の研究者自身の理解・解釈行為に依拠することになる。いわばそれらは理論と実践、普遍と個別、存在と当為のはざまを思考するための概念装置として機能するのである。したがってヘルバルト以来教育学的に意味づけられてきたタクト概念が、フンボルトの思想においても——通例とは異なる仕方で——重要な意義をもつと結論しても誤りではないだろう。

¹⁾ Johann Frierich Herbart, *Zwei Vorlesungen über Pädagogik* [1802], In: *Sämmtliche Werke. In chronologischer Reihenfolge.* (ed.) Karl Kehrbach/Otto Flügel, 1, Beyer: Langenzsalsa 1887-1912, 286. [ヘルバルト「最初の教育学講義」、高久清吉訳『世界の美的表現』明治図書出版、1972年、所収]

²⁾ ヘルバルトのタクト概念については特に以下の文献を参照。鈴木晶子『判断力養成論研究序説——ヘルバルトの教育的タクトを軸に』風間書房、1990年。

³⁾ ミュラーによれば、教育的タクトをめぐる言説はその意味内容から大きく三つに分類できる。第一にそれは「教授的・方法的原理」として用いられる。ここで教育的タクトは「理論的・一般的なものと教育実践ごとに特殊なものとを媒介する道具」として意味づけられる。第二にそれは、相互に矛盾する要求がなされる緊張の場において、「行為を方向づけるもの」として意味づけられる。第三にそれは、「教育的合理性と教育的要求の自己制限」として意味づけられる。詳しくは以下の文献を参照。ハンス＝リュウディガー・ミュラー「教育的タクトの理論のために」伊藤敦広、眞壁宏幹訳、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学・心理学・教育学：人間と社会の探求』80号、2015年、73-84頁。

⁴⁾ ヘルバルトとフンボルトの直接的交流については以下の文献を参照。Clemens Menze, Herbart, Hegel, Wilhelm von Humboldt. *Zwei Briefe Herbarts an Wilhelm von Humboldt*. In: *Vierteljahresschrift für wissenschaftliche Pädagogik*, 68, 1992, 181-202.

- ⁵ テクストの成立年は1795年から1797年頃と推定される。Cf. Wilhelm von Humboldt, *Werke in fünf Bänden*. (ed.) A. Flitner/K. Giel, 5, 1981[Studienausgabe 2010], Wissenschaftliche Buchgesellschaft: Darmstadt, 334-336.
- ⁶ 以下フンボルトからの引用はすべてアカデミー版フンボルト全集 (*Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften*, (ed.) Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin: B. Behrs Verlag, 1903-1936 [AA]) から行なう。引用の際は巻数と頁数を示し、原文と拙訳を挙げる。なお原文の隔字字体表記はすべてイタリック体に直し、訳文においては傍点で表す。さらに、タクト概念が用いられている箇所は原文、訳文ともに下線を付す。
- ⁷ AA 2, 79.
- ⁸ フンボルトは個体それぞれに特有の理想が存在すると想定し、この「個別的理想」という発想に基づいて自らの陶冶論を構想しようとしていた。「個別的理想」とその陶冶論との関連については稿を改めたい。
- ⁹ フンボルト『言語と精神——カヴィ語研究序説』亀山健吉訳、法政大学出版局、1984年、285頁。ただし訳文は必要に応じて変更している。
- ¹⁰ これについて詳しくは以下の拙論を参照。伊藤敦広「「他なるもの」の理想化としての陶冶—フンボルト陶冶論における古代ギリシャの意義—」『教育哲学研究』111号、2015年、53-71頁。
- ¹¹ 本稿では扱うことができなかったが、フンボルトの場合タクト概念はさらに別の文脈でも用いられている。たとえば、文法（理論）と言語活動（実践）のはざまを考える際に必要とされることから、タクト概念は言語教育・言語学習にも転用されるのである。遺稿である「バスク人研究断章」内の「言語研究について——あらゆる言語の体系的百科全書の計画」においてフンボルトは、言語教育・言語学習においてタクトが一定の役割を果たすと述べている。

Die Hauptschwierigkeit alles Lernens besteht darin, sich zu rechter Zeit zu orientiren, dem Gedächtniss durch Regeln zu Hülfe zu kommen. Nirgends fühlt man dies Bedürfniss so dringend, als beim Sprachunterricht.[...]; wenn man eine Zeitlang eine Sprache getrieben hat, wird einem klar, wovon man bisher keinen Grund einsah, und man gewinnt einen Tact, das noch nicht eigentlich Gelernte, nicht zu errathen, sondern mit Sicherheit zu erahnden. [AA 7, 599f.]

「あらゆる学習の主な困難は、正しい時機に知識を得ること、規則によって忘れたことを思い出すことにある。言語の授業ほどこれが必要であることが切実に感じられるところはない。[...] 一定期間ひとつの言語をやれば、それまで理由が分からなかったことが明らかになる。そしてまだ真に学ばれてはいるわけではないことも、言い当てられはしないが、確実さをもって予感できるタクトが得られる。」